

第9課 仕えること、救うこと

【暗唱聖句】

「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。」イザヤ 42:1

【日曜日・僕である民族】

イザヤ書には、2種類の「神の僕」について描写されています。一つは41:8のような「わたしの僕イスラエルよ。わたしの選んだヤコブよ」という描写です。これはヤコブの子孫であるイスラエル民族を現わしています。ヘブライ語の僕（エベド）という語は、「保護する。安全にする」という意味と、その下に仕えるという従属的な意味を同程度に表現するという特徴を持っています。しかし、ここでのイスラエルに対する神の呼びかけでは、「保護する」という要素のほうが明らかに優っています。

僕である民族の役割の中で最も大切なことは、主を信頼することです。神様は「あなたはわたしの僕／わたしはあなたを選び、決して見捨てない。恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える」（41：9、10）と約束されています。この約束を疑わず信じるのが、僕として最も大切なことです。

もう一つは、42:1のような「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を」との描写です。こちらは個人を指しており、神様が支え、選ばれ、喜び迎えたと書かれています。この僕が誰であるのかは明らかにされていませんが、その特徴を見ていくと、この僕がイエス様であることが分かってきます。その僕は、①「その上に神様の霊が置かれ、国々の裁きを導き出す」（42:1）。②「国々の光となり、神様の救いを地の果てまでもたらず者となる」（49:6）③「その姿は損なわれ、人とは見えず、もはや人の子の面影はない」（52:14）④「多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った」（53：11）⑤「僕は栄え、はるかに高く上げられ、あがめられる」（52:13）。このような特徴を持った者はイエス様だけです。

【月曜日・名前のない主の僕】

神様が選ばれた「名もない僕」、つまりイエス様の役割やご品性が、42:2～7にかけて詳しく描かれています。①「国々の裁きを導き出す」②「静かで、穏やか」③「教師」④「神と民との間の契約となる」⑤「癒し…目を開く。光、希望を与える」。イザヤ 11 章 1～「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち…」との預言は、この 42 章の「僕」と共通点が多くあり、どちらも同じメシアなるキリストを現わしていることがわかります。イザヤ書 11 章では、「神の霊が宿っている」「神様と調和して働く」「神様の知恵と知識を与える」「裁きを行う」「虐げられた人を解放する」などと書かれています。

また、マタイ 12 章では、イエス様のことをイザヤ書の「僕」に関連づけています。

「…イエスは皆の病気をいやして、御自分のことを言いふらさないようにと戒められた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。『見よ、わたしの選んだ僕。わたしの心に適った愛する者…』」マタイ 12:15～21

これにより、この僕は疑いの余地なくイエス様を現わしていることがわかります。

【火曜日・ベルシアのメシア】

「キュロスに向かって、わたしの牧者。わたしの望みを成就させる者、と言う。エルサレムには、再建される、と言い神殿には基が置かれる、と言う。」イザヤ 44:28

神様はユダの民を裁くために異教のバビロンを用いられましたが、民をバビロンから解放するためにも異教のペルシャを用いられました。その王の名がキュロス（2世）です。彼はアケメネス朝ペルシアの初代国王として、紀元前 550 年～紀元前 529 まで、古代エジプトを除く全ての古代オリエント諸国を統一し、空前の大帝国を建設

しました。現代のイラン人は、キュロスをイランの建国者と称えています。

神様はキュロスに対して、「わたしの牧者。わたしの望みを成就させる者」、さらに「油注がれた人」と言っています。「牧者」という表現されているのは、神様の羊である民を解放する働きをするからでしょう。また「油注がれた人」とは、メシアに由来する言葉ですが、その意味は本来「王」を現わしています。ただ、「わたしはあなたの名を呼び、称号を与えたが、あなたは知らなかった」(45:4)とあるように、キュロス自身は神様への信仰によって神様を知ることはありませんでした。

【水曜日・将来への希望】

イザヤが、彼の死後 146 年後にバビロンを陥落させたキュロスの名前を正確に預言していることは、聖書の預言の信ぴょう性の高さを現わしています。このことは神様の預言を信じる私たちにとって、大きな希望と確信になります。聖書学者の中には、キュロスの時代に生きていたイザヤではない別の人(第二イザヤ)が、イザヤ書 40 章～66 章まで書いたのではないかと主張する人たちもいます。しかし、それを証明する歴史的証拠はなく、聖書の中にも書かれてありません。また最古の写本とされる「クムランのイザヤ書簡」の 39 章と 40 章との間にも、別の著者によって書かれたことを暗示する切れ目は存在していません。さらに、40 章より前の 13 章・14 章・39 章の中にも、バビロン捕囚について預言されていますので、40 章以降だけ後から別の著者によって書かれたとするのにも無理があります。

問 8 に、レビ記 26:40～45 の中から、どのような希望を見出すことができるかとあります。

「しかし、もし彼らが自分と自分の先祖の罪、すなわち、わたしを欺いて、反抗した罪を告白するならば、たとえわたしが彼らに立ち向かい、敵の国に連れ去っても、もし、彼らのかたくなな心が打ち砕かれ、罪の罰を心から受け入れるならば、そのとき、わたしはヤコブとのわたしの契約、イサクとのわたしの契約、更にはアブラハムとのわたしの契約を思い起こし、かの土地を思い起こす」レビ記 26:40～42

罪を告白し神様に立ち返るなら、神様は私たちのことを思い起こして下さるとの約束です、このような約束は、裁きの只中で繰り返し語られていることです。ここに裁きの目的があるからです。このような言葉は、神様の裁きに直面した人々にとって大きな希望となるべき御言葉です。

【木曜日・苦難を味わう僕】

49 章 1－6 節は、「第二の僕の歌」と言われており、バビロン捕囚からの解放が反映されていますが、同時に、この中で呼び掛けられているのは、異邦の諸国民たちです。

「島々よ、わたしに聞け／遠い国々よ、耳を傾けよ」(49:1)

「島々」は、当時の地理的知識の限界を越える終末的な広がりを示し、世界の諸国民に対して、「わたしに聞け」「耳を傾けよ」と呼び掛けられています。また、「地の果てまで」(6 節)と表現されているのも終末の全世界的規模であると言えるでしょう。

「あなたはわたしの僕、イスラエル／あなたによってわたしの輝きは現れる、と。」イザヤ 49:3

この「僕」とは、文脈からイエス様のことを現わしていますが、イエス様のことを「イスラエル」とも呼んでいます。僕なるイエス様が、「イスラエル」の名にふさわしくない民族の理想的な体現者、代表者であるからです。49:4 になると、「わたしは思った。わたしはいたずらに骨折り、うつろに、空しく、力を使い果たした」と、僕の働きに困難が伴うことが暗示されています。しかし、彼は、「わたしを裁いてくださるのは主であり／働きに報いてくださるのもわたしの神である」(49:4)と、主に信仰を置いています。そして、こう続けます。「イスラエルを贖う聖なる神、主は／人に侮られ、国々に忌むべき者とされ／支配者らの僕とされた者に向かって、言われる。王たちは見て立ち上がり、君侯はひれ伏す。真実にいますイスラエルの聖なる神、主が／あなたを選ばれたのを見て。」(49:7) 苦難を通りますが、最後はすべての者たちがひれ伏します。